
幼なじみはお嬢様

和藤渚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼なじみはお嬢様

【NNコード】

N6824D

【作者名】

和藤渚

【あらすじ】

病弱な主人公にあれやこれやと世話をするお話

「「ゴホッ」「ゴホッ」「ゴホッ……」

今、僕の状態は震えるほど寒く、何も考へられないほど頭が痛い。
そして咳が止まらず、鼻水も止まらない。熱は38・2度。
そう風邪を引いているのだ。

いまは桜も散り葉が着き始めるちょうどいい季節だつていうのに風
邪を引いている。

まあ昔から病弱だった僕にとつては日常茶飯事。

「ゴホ」「ゴホ」「ゴホ」……

と近所迷惑のレベルをはるかに超えていた轟音が鳴り響く。
間違いない！！！ あの人だ！！！

「釜田英太郎？ もつてきましたわ。」

と最低でも1台2000万はする自家用ヘリで颯爽と現れた金髪で
腰まである綺麗な長い髪に、外国人のようなはつきりとした目鼻立
ち、透き通った碧い瞳、まるでフランス人形をそのまま人間にし
たような美女。

この人は誰もが恐れる美川財閥の娘であり次期後継者もある、美川亞由美みかわあゆみ僕の幼なじみである。

「普通に入つてこれないのか？いつもいつも……」「ゴホッ」

「私が来たからにはもう大丈夫！」

と自信満々にいう亞由美。

大丈夫なわけね～だろ～！～！

風邪を引いたびにこの調子で薬を届けにくる。

たくつ！ いつになつたらちゃんと玄関から自家用ヘリを使わずに
入つてきてくれるのだろうか？ それともそれは、一生かなわない夢
なのか……

普通なら近所から苦情がたくさん来てもおかしくないのだがなにし

ろ誰もが恐れる美川財閥である。

何をされるかわからない。

何人かは屈することなく苦情を言つたのだが、その人たちのみんないつの間にか姿が無くなる。そつそつこの間引越して何も知らずに苦情をいつた勇気ある人の家もさら地になつていた

ご愁傷様です……

そしてホントに「めんなさい……

近所のみなさんも毎回すいません本当にと心の中で謝るなか、

「これは抗生素質で一日3回食後に飲む」と。副作用で眠くなるから氣をつけて。後これは・・・

と何事もなかつたように薬の説明しだす。

風邪を引くたびに思う。そんな薬より胃薬が欲しいとかれ？ 気にしてなかつたけどなんていつも僕が風邪引いていることがわかるんだろう？

それにどこから薬を調達してるんだろう？ そもそもなんで僕にそんなことをするのかがわからない

と考えるといろいろと黒い部分がみえてきやうなのでやめようこれが以上は……

「では私はこれで。お迎えは？」

「いいわ。明日、英太郎と一緒に登校するから」

おい！！ 泊まつていく気かよ！！！

「左様で」いりますか。では英太郎様くれぐれもお嬢様をよろしくお願ひします

とS.Pの人であろう黒ずくめの人があつて自家用へりとともに去つていった。

美川財閥は100年以上の歴史がある由緒正しいお家。

そのためいろいろと英才教育施されている。

亞由美も例外ではないそのためか成績は常にトップ何にでも手本にされる存在。

次期後継者だからと生徒会長になるつもりだといふ。お願いだから独裁になるのだけは止めてもらいたい。

薬の説明が終わると

「もうお昼食べました？」

「いや、まだだけど」

「この私が作ってあげます」とよ?」

「遠慮しとくよ……」

「遠慮する必要がどこにありますの?」

彼女はたしかに何でもできるが料理だけは苦手だ。

本人は気づいていない様子。いや気付いてるけど認めたくないのだ
るづ。

遠慮じやなくて拒否してんの……拒否……わかつてます?

という心の叫びを尻目に彼女はケータイを取り出しどこかに電話し

始めた

「松坂牛と……産のワイン1973年モノで。あと……」

と次々と手に入れるのが非常に困難と思われる高級食材を伝えていく。

まあこの人の財力と権力なら簡単に入手出来るんだろうけど……

数十秒後

「わかった」

と掛かつて来た電話を切った。

「では作ってきますわ」

と一階に降りていった

は〜……これでやる仕事が一つ増える

僕は頭を抱えた。

「きやー」

「^{わたくし}私の言つこと聞きなさい!……」

「わ〜」

と不安な叫び声が聞こえてくる。

はあ後で自分で作るかうなだれた。

なんだかんだで完成した得体の知れない料理、いや料理というべき
なのかとにかく異臭漂う変な色をしたモノが入った皿たちが並んだ。
「これは伊勢えびのリゾット、これは松坂牛のたたき、これは……」
と料理の説明をするが言われてもわからない

第一まだ熱があるので食欲がない

「ゴメン食欲がないんだ」

「それは大変!!!! 早く食べないと!!!! サあどうぞ」

と説明をやめ勧める亜由美だがどうも食べる気が起こらない。

熱があるからでもあるが、一ヶ月空腹で死にそうな人でも一目で食欲が失せるような料理である。

選択権のない僕はどうちにしても死ぬことは確定してるわけで……
そして僕は腹をくくつた。

「いただきます」

引き攣つた笑顔で口に運ぶ。

「ゴホゴホゴホッ……」

初めて体験したこの地球上に存在しないような味。

こんなの食べ物じやないよ……

と内心思いながら

「おいしそよ」

とまた引き攣つた笑顔で感想をいふと

少し顔が赤くなり

「当然ですわ。このわたくし私が作ったんですから」と自慢する。

あれ？ なんで赤くなってるんだろう？ 風邪引いたのかな？
としばらく考えてみる。

「ちょっと来て？」

「なんですか？」

と亜由美は近づく。

そして両手で彼女の頭をそっと自分の額にもつてくる

「熱はないようだけど……」

すると彼女の顔はますます赤くなりとつたに離れた。

「何をするんですの！？？」

とひつぱたかれた

え……？ なんで……？

そんな時ピーンポーンと救いのチャイムがなった

「はい」

と喜び勇んで階段を降りた

玄関には友人の加藤と杉田がいた。

「おやつてるね」

「今日も来てるのか？」

「なんでわかんの？」

「この地球上にないような臭い、お前の今にも死にそうな顔見ればわかるよ」

「とりあえず上がつてよ」

と一人を家に招き、自分の部屋に入れ、トイレに行つた。

「ういーっす」

「来たよ」

「あら？ 来ましたの？」

少し不機嫌そうな畠由美。

加藤は料理を見て味見をしてみる。

「お、これはヒドイね。道理で英太郎くんが死にそうな顔なわけだと冷静に批評する。

「でも英太郎はおいしそうって言つてくれましたわ」

「あいつならそういうさ」

「まあ優しいからね。英太郎君は」

と二人は言つた。

「もしかして今の料理で英太郎に完全に嫌われたってことですか？」

「風邪引くたび毎回強引に食べさせればね」

「そんな……」

「大丈夫。まだ起死回生できるから」

ソノコロ僕はとこ‘うと
グルグルグル……

この腹痛と格闘中。

お父さん、お母さん先立つ不幸をお許しください……と書きたくなるくらいの痛み。そして

今日はしつこいな……

いつもいつもやってくれるじゃん

いつもやることは金と権力使ってハチャメチャででも憎めない不思議な人。

それにしてなんでいつもここまでしてくれるんだろう?

こうやってトイレで悩むのも恒例になっている。

しかし答えが出たことは無い。

おなかの調子はなんとかよくなつたので部屋に戻った。
入るなりす”い重い空氣。

なんだよ……この空氣……

「ど……どつしたの?」

「いやちょっとな」

「そようそお前台所借りるぞ」

「別にいいけど。なにするの?」

「それは秘密だ。美川さんもきて?」

そういうて僕を残しみんな台所に向かつた。
なにするんだろ?」

「うわ~」

「どうやつたらこうなるんだ?逆にす”いよ

台所の惨状に驚きながらも使えるまでに片付いた。

「さあ～やるか」

「何をするんですの？」

「言つたろう？起死回生できるつて」

「またつくれうよ？俺たちが手伝つから

「このままじゃイヤでしょ？」

「あなたたち……」

「持つべきものは友つてね」

そして料理を開始した。

「たくつ驚いたよ。まさか一国を動かせる大財閥の娘が病弱で内気な英太郎が好きだとは」

「そんなんじやなくてよーー！」

と必死に否定する亜由美。

「顔、赤くなつてゐぞ。塩とつて
「素直になろうよ」

そうあのときから私は……

私はその時お稽古事が苦痛で仕方なかつた。とても厳しくある田川
いに逃げ出しきつた。

初めての公園で

「こんなもので庶民は遊んでますの？ 貧乏くさいこですわね」と
いろいろ回つてみると

「うわーー！ 髪が金色だぞ？」

「妖怪だーー！」

「何が妖怪ですか？ れつきとした人間ですか！」

「妖怪がしゃべつたら怖いよー怖いよー」

「来るな妖怪金髪女」

と一人の悪がきが突き倒した。

「うわー妖怪に触つてしまつたーー 手が……」

と逃げていく悪がきたち。

私はうずくまつていた。

しばらくすると

「大丈夫？ どこか痛いの？」

と一人の男の子が声をかけてきた。

「いいえ。違いますわ」

「なんで泣いてるの？」

「なんでもないですわ」

「痛いの、痛いの飛んでいけ～、痛いの痛いの飛んでいけ～」

と頭をなでる男の子。

「もうなにをするんです！！？ 私に**わたくし**関わらないでください！！！」

と彼を見上げると私にっこりと笑つてこう言つてくれた

「お友だちになる？」

そして私はまたうつむいた。
とても嬉しかつた。

大財閥の娘だからとたくさん厳しいお稽古^{わたくし}^{（ごじゆく）}とをし、接する人たちも大人の人ばかり。たまに同じ年の人と接すると思えばが私の政略結婚のお見合いだし。外にでれば美川と名乗つただけで態度が変わつたり逃げ出したりする。

「私を誰だと思つてますの？」

「誰？」

「聞いて驚かないことね私は泣く子も黙るあの美川財閥の一人娘美川亞由美よ！――！」

「…………」

そういうと彼はキヨトンとしていた。

(そうよね？ 美川って言えば誰でも驚くわ)

「……みかん？ さんぱつ？ それと友達と何の関係があるの？」

「美川財閥です！――もういいです！友達にでも何にでもなつてあげようではありませんか！――！」

「本当?」

「本当にです」

「やつたーーー!」

無邪気にはしゃぐ男の子はとても眩しく見えた。

「英太郎? 行くわよ?」

と少年の母親らしき人が近づいてきた。

私は立ち上がった。

「お母さん? 僕ね、お友達が出来たんだ?」

「へーこの子がお友達になつたの?」

「うん」

「お名前は?」

「美川亜由美」

と小さな声でぼそつと言つた。

「聞こえないな~ お名前は?」

そして勇気を振り絞つて

「美川亜由美」

今度は公園中に響き渡るぐらい大きな声でいった

(名前を言つたとたん態度が変わるんだ。いつもそしてそのことを知るや否やこの子を気に入らせようとするんだ……この人もきっと)

「そう? 英太郎と仲良くしてあげてね?」

と優しく微笑み頭を撫でる。

意外な反応に私は戸惑いを隠せなかつた。

何かとも心地いいものに包まれているそんな気がした

「お嬢様!! こんなとこにいたんですか? 行きますよ」

と私は見つかり連れて行かれたのだ。

それからしばらく毎日のように公園に行くが彼の姿は現れず、ある日マスクをして辛そうに母親に連れられているのを見た。

それからであるそのたびにお見舞いに行くようになったのは

「美川さん？ 手が止まつてゐるぞ」

「あ……アチアチ」

「しつかりしろよ？ 考えことか？」

「まあそんなとこですわ」

「どんどん調理が進んでいく。

そして先程とは違う立派おかゆが出来た。

おかゆの入った鍋を持つて行く。

階段からいい匂いが漂つてくる。それに釣られて食欲もでてきた。

「ほら出来たぜ」

と加藤がいつてみんな僕の部屋に入ってきた

杉田がふたを開けると

湯気がもくもくと立ち上がりその中には綺麗に輝く米が印象的だ。

「これ美川さんが作つたんだよ。英太郎くん」

「ほんと二人に手伝つてもらつたんだけど」

「ちゃんとたべてやれよ？」

とこう一人は部屋から出ていった。

「いただきます」

とお椀について一口食べてみる。

「すげー！ セッキと全然違う、程よい塩あじで食べやすい食感。あまりのうまさに僕は搔き込んだ。

ついに完食。

「おいしかつたよ。ありがとう。亞由美」

「当たり前ですわ。この私が作ったものですよ？」

本日一回目のこの言葉。

こっちの方がとても嬉しそうに聞こえる。でも一つ疑問が残る。

「ねえなんでまた作り直したのかな？」

すると異様な雰囲気の沈黙が流れた。

あれ？なんか僕変なこと言つちやつた？

「私……帰る……」

と彼女は部屋を去つていった。

「え？ 今日泊まるんじゃなかつたの？」

「……もういいです」

と部屋から去つていった。

どうしたんだろう？

「はあ……」

「またダメだつたか……」

「こればっかりはどうにもならないもんね」

二人は亜由美を慰めるのであった。

私は美川亜由美。美川財閥の一人娘で次期頭首。今まで欲しいものは全て手に入ってきた。でも一つだけなかなか手に入らないものが
ある。

それは……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6824d/>

幼なじみはお嬢様

2010年10月9日04時08分発行